

## 大津事件と「司法権の独立」問題

元 川 房 三

は し が き

この講義は、法学部学生ゼミナール委員会からの依頼に応じて行ったものである。しかし、その講義案は、私自身の研究成果に基づくものではなくて、国際法学の泰斗岡良一博士の著書『大津事件の再評価』（有斐閣、昭和五十一年一二月）に対する私の書評、すなわち、日本国際政治学会編『国際政治第五八号——日英関係の史的展開』（有斐閣、昭和五十三年三月）紙上に掲載された書評を土台として、講義用に再構成したものである。「大津事件」は、別に「湖南事件」とも呼ばれている。

ここにとくに附記しておきたいのは、全く思いがけなくも、著者田岡先生から同年四月五日付のまことに丁重かつ長文のお手紙を頂戴したことである。そこには、右の著書の論旨の敷衍や新たな説明のみならず、私のささやかな疑問に対するお答えさえも述べられていた。拝読した私の感激は何んとも言い表わしようもなく、折返しお礼の返書を差し上げたことは言うまでもない。

なおここでお断りしておきたいことは、講義時の表題を改めて本文表題のように変えたこと、またその上、口演風の表現を止めて普通の文章体で整理し直し、しかも講義時に時間の関係から省略したところをかなり補足したことである。

### 講義の趣旨

歴史はたえず書き改められる余地を残している。というのは、普通私どもが知っている「歴史」とは、「書かれた歴史」だからである。この「書かれた歴史」つまり「知識としての歴史」というのは、後世の歴史

家が過去の生活事実としての個々の記録・遺物類を調査・研究して、それらを筋道のつくよう解釈した上、書き綴ったものにはかならない。したがって、たとえ通説とされている記述であつても、それが全く正しい、あるいは間違いないなどと言ひ切れるかどうか。そこには常に論争的なものが残されているのである。

さて、いわゆる文明開化の明治の世になって、比較的資料が整ひ研究にそれほど困らないと考えられる時世になつても、やはり安心はできない。それを痛感させられるのが、これから述べようとする「大津事件」における「司法権の独立」問題である。

この「大津事件」は、明治三四年（一八九一年）五月、日本旅行中のロシア皇太子ニコラス殿下が、大津において警護巡查津田三蔵から傷害を受けるという事件である。この事件処理つまり犯人津田三蔵の裁判に当たつて、時の大審院長の児島惟謙（こじま これたか）が、津田の犯行を死罪とする法規のないことを主張して、政府の干渉を排して無期徒刑判決に持つていったという、つまり、わが国司法権の独立を守つたというのが通説となっている。これは、児島惟謙の故郷、愛媛県宇和島市にある穂積重遠博士の手になる顕彰碑頌文にもある通りである。

ところが、この通説を諸資料によつて調べ直してみると、政府の干渉云々よりは、むしろ児島大審院長の言動に多大の疑問が出てきて、わが国司法権の独立を守つたなどとは、どうしても言い切ることができないのではないかと云うわけである。

### ロシア皇太子の来日と事前秘密協定

ロシア皇帝アレキサンドル三世の配慮によるニコラス皇太子の極東視察旅行が決つたとき、駐日ロシア公使シェーヴィッチは、とくに外相青木周蔵に会見を申入れ、ニコラス皇太子一行の来日中における危害抑止について強い要請を行つた。青木周蔵は明治三二年二月二十四日成立の第一次山県内閣の外相を務めていたが、この年つまり明治三四年（一八九一年）の五月六日に成立したばかりの第一次松方内閣にも、引き続き外相として留任していたのである。それでは、シェーヴィッチがどうして青木外相にこのような危害抑止に

ついでに強硬な申入れを行ったのかと言えば、当時の刑法、すなわち、フランスの法学者ポアソナード教授の草案に基づき明治一三年太政官布告第三六号の形で制定・公布された日本最初の刑法の中に、外国の君主・王族に加えた傷害犯罪を罰する規定がなかったからである。青木外相は同公使の再三の要請に抗し兼ね、まさにその場逃れというか、万一そのような不祥事件が発生した場合には、刑法第百十六条に規定されている皇室罪（死刑）を適用する旨の約束を交わしたのである。これは単なる個人間の口約束などと言える性質のものでないことは言うまでもない。

さて、ニコラス皇太子は、三月半ば、親戚筋に当たるギリシア第二王子ジョージ殿下ともどもギリシアを立った。一行を乗せた七隻の堂々たるロシア艦隊は、四月二七日長崎に入港し、五月四日上陸した一行は官民の歓迎を受け、次いで、同じく六日、鹿児島に入港して島津公らの歓待を受けた。そして五月九日、神戸に入港した一行は、神戸市内観光の後、同日午後四時発の列車で京都に向い、現在の京都ホテルの辺りにあった常盤ホテルに落着いた。そして翌五月一〇日、一行は京都観光に一日を費したのである。

### 事件の発生と日本の混乱

五月一日午前七時半、ニコラス皇太子一行は常盤ホテルを出発、有栖川宮接待委員団を加えた百数十台の人力車行列は東海道を天津に向った。皇太子らは琵琶湖畔の観光を楽しんだ後、滋賀県庁で昼食をとり、午後一時半県庁を出発、京都への帰路に就いた。ところが、一行が県庁を出て、間もなく行路の市内京町通を進行中、警護に当たっていた巡査の一人、津田三蔵は、目の前をニコラス皇太子の車が通り過ぎるのを見ると、突如、抜剣して右斜めうしろから走り寄り、皇太子に切りつけた。剣はこめかみ辺りをかすめた。直後の車に乗っていたジョージ王子は、これを見るや、咄嗟に手にしていた竹の鞭で津田の背中を打ち、のめって取り落とした津田の剣を拾い上げた車夫が津田の背後から切りつけた。深手を負って倒れた津田は、そこで逮捕された。遭難のニコラス皇太子は、幸い軽傷で、一旦滋賀県庁に戻って仮手当を受けた後、大津馬場（はんば）駅（現在の膳所駅）午後四時発の列車で京都へ帰還、常盤ホテルに入った。

兇変の電報は、午後二時半、東京に到達し、直ちに閣僚・元老から成る宮中會議が開かれ、とりあえず慰問使として北川宮能久親王の京都差遣が決まったほか、青木外相と内相西郷従道が夜行列車で西下することになった。

五月一二日、明治天皇は午前六時半特別列車で新橋駅発、午後一〇時京都七条駅着、京都御所へ入られた。一方、この日早朝より、善後策討議のための閣僚・元老合同會議が開かれた。その席上、伊藤博文は戒嚴令発布の意見を述べるなど、意見は纏まらず、対策に苦しんだ。伊藤博文と黒田清隆は午前一一時新橋駅発の列車で西下することになったが、この伊藤らに対して、発車前、見送りの通相後藤象二郎と農相陸奥宗光は、津田殺害を提案した。しかし、伊藤はこれに反対した。また一方、法相山田顕義は省議を開催し、その席上で刑法第百六条適用説を開陳したが、反対論が出て三時間に及ぶ會議となり、結局、結論は出ず仕舞いであった。

五月一三日、入洛の伊藤博文らは、常盤ホテルにおいてシェーヴィッチ公使と早朝會談を行った。席上、同公使は先の事前交渉のを取り上げ、日本側を痛烈に非難した。これに対して、伊藤らが返答のしようもなかったのは当然であった。明治天皇は、午前一時、常盤ホテルにニコラス皇太子を見舞われ、快癒後には予定通りの日本旅行を進められるよう懇請されたが、ニコラス皇太子一行は、午後四時、常盤ホテルを出発して神戸港碇泊中の坐乗艦パミヤート・アゾーヴァ号に移った。天皇はシェーヴィッチ公使の要請によって神戸埠頭まで同伴されたのである。

この日、東京においては大審院判事會議が行われ、全員が刑法第百十六条の適用に反対し、通常の謀殺未遂犯として、第百十二条および第百十三条にしたがって裁判を進めることに賛成したのである。

ニコラス皇太子について言えば、坐乗艦に移った翌日の一四日、有栖川宮以下の接待委員団を艦上に招待し、今回の事件によって日本に対する悪感情など抱いていないことを重ねて強調したという。ところが一六日夕刻、明治天皇の懇請にもかかわらず、「五月一九日神戸を出帆してウラジオストクに赴く」という電報が明治天皇宛に発信され、その一九日には、明治天皇を招いてのお別れ艦上午餐会が催された。そしてその日の午後四時、ロシア艦隊は神戸を

出港、大騒ぎの日本を後にして、翌二〇日夕刻、下関海峡を通過、皇太子の旅行目的の一つであったシベリア鉄道終着駅の起工式に臨むべく、ウラジオストクへと向ったのである。

### 政府側の態度と対司法部工作

五月一五日、京都御所において御前会議が開かれ、ロシアに対する陳謝特派使節差遣の件、津田処刑問題を中心として討議が行われた。青木外相は、刑法第百十六条の適用を容易にするための詔勅發布を提案した。伊藤博文はこれに賛意を表したが、枢密院書記官長伊東巳代治の反対によって中止となった。なお、特派使節差遣のことは、ロシア側の辞退によって取止めとなった。

五月一六日、伊藤、井上（馨）の元老は、神戸においてシェーヴツ公使と会談した。同公使は、皇太子礼遇が疎略であることや青木外相の不誠意などについて重ねて不満の念を表明した。そしてそのあと、伊藤らの意を受けて面談を求めてきた枢密顧問官榎本武揚から、去る一二日に結論された大審院判事会議の意向つまり通常の謀殺未遂犯として取扱う旨決定の趣を聞くと、シェーヴツ公使は、まさに憤然として日露国交の破綻もあるかも知れないと当てこすったのである。

日本全国パニック状態の最中にあった五月一八日の午前になって、松方首相は、先の事前秘密協定すなわち青木・シェーヴツ約束を新任の大審院長児島に打ち明け、司法部の善処方を要望するとともに、政府側と大審院特別裁判部判事団との面談許可を求めた。これに対して、児島院長は、この問題は特裁部の決定事項であって、院長とは言え、何ら私見を差し挟む立場にはない旨を述べた上、政府側と特裁部判事らとの面談についてはこれを承諾し、判事七名の氏名を教えた。そして重ねて独立なる裁判官の決定には大審院長と雖も干渉できないと述べたのである。

その日の午後、山田法相、陸奥農相の二人は、司法部において特裁部判事四名と面談、日露友好のために判事団の善処方を懇請した。長い特裁部会議を終えた判事一行は、一九日午後九時五〇分新橋駅発の列車で西下、翌二〇日午後、打ち揃って京都御所へ参内したが、明治天皇からも判事団に対して容喙的な言葉は出されなかったようである。

簡単ながら以上に述べたように、政府側には、特裁部判事と面談して事情説明や善処方の要望を行った事実はあるものの、そこに裁判官の独立侵害・司法権干渉などという事実や意図は認められないのである。また諸会議における発言や個々の意見表明の中には、国家非常理由による戒嚴の宣言、あるいは応急的事後法的勅令の発布、さらには犯人殺害論などさえ出るには出たが、結局、いずれも否決または否定されている。そこに、国難を憂慮しながらも、法の効用には限界があるとする政府側の態度がはつきり現われている。

### 児島大審院長の言動と判決に至る経緯

事前秘密協定のことを松方首相より打ち明けられた児島院長は、

その一八日、検事総長三好退蔵からの請求に基づいて、裁判所構成法にしたがい、大津地方裁判所の土井判事に対して大審院としての予審開始についての電命を発した。

一方、特裁部判事会議は、夜来の長時間審議の後、一九日午前二時ようやく纏まり、ロシア皇太子傷害事件を大審院の公判に附すべしという逆転的結論、つまり刑法第百十六條の罪（皇室に対する犯罪）に該当することの認定に到達して、その決定書を山田法相に提出した。そこで、午前八時になって、大審院法廷を大津地裁において聞く旨の司法大臣告示が公表された。

ところが、その同じ五月一九日、児島院長は、特裁部決定書とは異なる見解を述べた意見書を松方首相ならびに山田法相に当てて提出した。というのは、先の大審院判事会議五月一三日決議、すなわち刑法第百十六條の適用に反対して、通常の謀殺未遂犯として第百十二条および第百十三条第一項の適用を相当とするという決議が翻ってしまったからである。そして児島院長は、この日の夜行列車で西下の特裁部判事団と同行し、二〇日午後京都御所参内を終えた判事一行とともに、大津の宿舍竹清楼に同宿したのである。

五月二一日、公判日は五月二五日と決定された。児島院長は、裁判長の堤正己判事を宿舍の自室に招いて、自己の見解にしたがって強硬な諫告を行って後、大阪控訴院長時代の残務整理と事務引継ぎのために下阪した。

五月二三日早朝、児島院長は同郷の大阪地裁判事齋藤龍宅において自分宛の穂積陳重博士の手紙を読んだ。それは、政策上必要ならば、緊急勅令の発布によって適及的に津田犯行に適用し、死罪とすべきことを松方首相に進言した旨が認められていたのである。

堤裁判長より大津に来られたしの電報を受けた児島院長は、午後二時来津し、宿舎においてまず堤裁判長と会談した後、各判事と個別対談に入った。そして先の一九日決定書を破棄した上、津田三蔵を通常の謀殺未遂犯として処分することを勧説したのである。さらに児島院長は、三好検事総長を説いて、両者連名による司法大臣宛電報連絡について同意させ、二四日午前一時発信した。その電文は、刑法第一百六条適用の見込みがないことを伝えるとともに、それに附け加えて、今としては事後法的緊急勅令によってあらためて第一百六条の適用のことを考えてはどうかの進言まで含まれていた。

この電報を受けた山田法相は、時を移さず、二五日公判の延期請求を特裁部に行うよう三好検事総長に訓電を発した。三好総長から伝えられたこの延期請求を特裁部は承諾した。一方、山田法相と西郷内相は、特裁部の行った変更理由を聴取するため、午後二時新橋駅発の列車で大津に向った。

五月二五日、山田、西郷の両相は、滋賀県庁において三好総長を同席させて児島院長と会談したが、特裁部判事団は山田法相との面談を拒否して、公判を二七日に開くことを決定した。公判延期と関連するが、三好総長が検察側として緊急勅令発布に反対する旨の公電を司法大臣宛に発したのを知った児島院長は、先の自己宛穂積書簡に対する返書として、どうやら政府に緊急勅令発布の意向が見える旨をも書き添えた穂積宛書簡を発送した。しかし、この点は明らかに児島院長の早合点、勘違いであった。

かくて五月二七日、午後零時三〇分に公判が開始され、審問および有志の弁護を織り込んだ法廷弁論は、午後三時三〇分すべて終了した。そして判事団の別室協議のあと、午後六時半、津田三蔵に対して判決言渡しがあった。通常

の謀殺未遂罪の適用すなわち無期徒刑の宣告であったことは言うまでもない。

なお、ここで附け加えておかねばならないことは、津田三蔵に刑法第百十二条および第百十三条を適用して、彼を通常の謀殺未遂犯として処分することについての法廷問題である。ということは、このような通常の謀殺未遂犯ならば、法上当然に大津地裁の管轄でなければならないのである。それなのに、津田の犯行を改めて当初の通りの通常の謀殺未遂犯と認定した大審院側は、延期法廷を開いて右のような判決を宣告するという、全く管轄違いの誤りを犯したのである。山田法相らが帰京する日、馬場駅頭まで見送りに出た児島院長に対して、山田法相がこの管轄違判決を詰ったとき、児島院長は「大は小を兼ねる」と苦しい返事を行い、またその後の政府部内からの異論に対しても、すべて頬被りを決め込んだのである。

### 児島惟謙の心境

それでは、一体何が児島をこのような頑強な態度をとらせることになったのか。言い換えれば、児島が闘って粉砕しようとしたものは、そもそも何であつたのであろうか。

児島は、元老を含めた政府要人たちを恐露派と見ていたようである。そしてその影響を受けた国民たちが、今回の「大津事件」に対するロシアの報復を恐れ心配する有様を齒嚙ゆく思う以上に、彼はそれを神経病患者流の被害妄想と断じ、政府要人の平身低頭、他動屈從的外交振りに最大の反感・反発を抱いていた。この彼の念頭にあるものは、ロシアは野蕃国ではなく、法律の何たるかを知っており、不当過酷な要求を突きつけて、諸外国の非難を招くような拙策をとらないであろう、この際、法を正しく適用し日本の司法官の信用を勝ち取ることが、念願の不平等条約改正のためにもなるというものであつた。

要するに、児島は、法を曲げて適用しようとする政府の行為に示されている外交の指導精神に挑戦したのである。宇和島藩を飛び出し、倒幕運動や戊辰の役に活躍し、その後一意法律を勉強してきた彼には、わが民族の独立と興隆のために是非護らなければならない重大な価値と考えられるものが、政府の便宜主義によって押し潰されそうになっ



ているように見えた。そこで、彼は身を挺してこの価値を救おうとしたわけである。

因みに、不平等条約というのは、安政元年（一八五四）三月、アメリカの特使ペリー提督との間に結ばれた日本開国を目的とする日米和親条約（別名神奈川条約）を前提として、安政五年（一八五八年）七月にアメリカ総領事ハリスとの間に結ばれた日米通商条約（別名下田条約）、ならびにそれと関連して先進諸外国との間に結ばれた一連の諸条約のことである。この不平等条約の改正は、当時の日本の国是であり、国民すべての念願であった。

### 国民一般の衝撃と動揺

ニコラス皇太子坐乗の新造六千トンの装甲巡洋艦パミヤート・アゾーヴァ以下七隻の堂々たる艦隊は、有栖川接伴委員団が坐乗し具奉する巡洋艦八重山（千六百トン）以下五隻の貧弱な艦隊を全く圧するばかりで、まさに世界の六分の一を領有する大ロシア帝国の威力を日本人の前に遺憾なく誇示していた。事故発生のことが一兩日中に全国に知れわたる中で、山田法相すら、「ロシアから賠償として領土割譲を要求してくるかも知れない。まさか九州を要求するようなことはあるまいが、千島ぐらいいは……」と言ったという。

この山田法相の危惧も理由がなかったわけではない。イギリスに対抗して極東政策を進めていたロシアは、斜陽化した清朝中国を強圧して、すでに一八五八年（安政五年）に愛琿条約、また一八六〇年（万延元年）到北京条約を結んで、アムール河（黒龍江）以北ならびに沿海州までも手に収めていたのであり、しかも一八七二年（明治五年）にはウラジオストクに海軍基地をも構築していた。詳細はいざ知らず、一般国民にも大勢はわかっていたようである。明治八年（一八七五年）の日露間の千島・樺太交換条約の締結も、このような国際情勢を背景としていた。

国民の中からも深甚な遺憾の意を表明する者が出たし、ロシア皇太子の迅速な快癒を祈念する全国的運動が湧然として展開した。皇后陛下からは、ニコラス皇太子に対して陳謝と慰問の電報が発せられるとともに、その病状報告がロシア宮廷宛に連日電信された。劇場・取引所・会社の臨時休業、東京にある各学校の休校、それに歌舞音曲の停止などがあった。一方、ロシア皇太子宿舎の常盤ホテルへは全国からの見舞の郵便・電報が引きも切らず、また続々届

けられる見舞品は幾つも山をなす有様であった。

その中で、ニコラス皇太子の日本旅行について一般がなお一縷の望みを掛けていたのに、一六日夕刻になって、ニコラス皇太子からの明治天皇宛ての電報（五月一九日神戸出航）があったのである。政府側は別の予感を持っていたが、さなきだに疑心暗鬼に怯えている一般国民に、この電報がさらに大きな衝撃を与えることになった。

### 事件の発生・経過に伴う人心の動向

まず、もと伊賀上野藩士であった犯人津田三蔵の殺意を探ってみよう。法廷供述に見られるその要点は次の通りである。

ロシアは交換と称して樺太をわが国から強奪した。さらに日本を横領しようとする野心を抱いており、今回の皇太子の来日はそのための下検分である。だから、これは生かして帰えすわけにはいかない。それに、まずは東京へ来て天皇にご挨拶を行うべきなのに、それを後回しにするとは、大逆無礼である。

このような津田流心意の中に、日本人特有の国民心理の現われやまた国際意識の働きを見てとることができる。それといま一つ、津田独特の心境が附け加わっている。今日からすれば、実に馬鹿々々しい話であるが、その当時の日本には西郷隆盛生存説が流布していて、この西郷をニコラス皇太子が同伴してくるという風説を津田三蔵がまともに信じていたのである。西南の役に従軍した身として、所持している勲賞返上のこともあるのではないかと、彼はまさに本気で心配していたという。因みに、津田は、判決のあと、釧路監獄に収容され、同じ年の九月三〇日そこで病死している。三五才であった。

事件発生から判決に至る二週間余りの間に起った国内の出来事のいくつかを拾い上げてみよう。その一つ一つにも日本人特有の国民心理が面白く現われている。

その一つは、津田三蔵に対する憎しみの表明を示す事例である。山形県最上郡金山村では、五月一三日、緊急村会が開かれ、本村住民は津田姓を付さず、三蔵名を命名してはならない旨の村条例第二号が制定された。

次には、津田三蔵に対する憤激の表明事例である。三蔵の義兄に当たる伊賀上野町在住の岡本静馬は、事件後、三蔵の家族であった妻と二人の子供ならびに老母を自宅に引き取って謹慎させていた。これを知った上野町の住民は、「かかる無上の大悪人の家族をわが町内に住まわせて置くことは、世間に対して恥しく、また申し訳ない」として、一週間以内に退去させるよう岡本家に申入れたのである。

いま一つは、いわば国難を憂慮する悲劇的な現われである。全く無名の畠山勇子という二七歳になる一独身女性だが、五月二〇日深更、臨時内閣の置かれている京都府庁の門前で、遺書教通を残して剃刀自殺を遂げた。その遺書からわかることは、天皇の大御心を推し測り奉り、国難を救うためには、国民の中から命を捧げてロシアに詫げる者が出なければならぬと決心したというのである。

ところが奇妙なことに、以上のような出来事が象徴しているような人心の動向が、事件発生後十日ばかり経過すると、はっきり変わってくる。政府内部では、五月一六日のニコラス皇太子の電報によって、ロシア側には賠償その他の要求意志のないことの察しがある程度ついていたのであるが、一般の人心が事態を感じ取るのは、時間の経過による。どうやらロシアは何もしないらしい、日本は無事だということが次第に分ってきた。人心の変化は恐しい。

まず、津田三蔵が一躍愛国の志士に祭り上げられた。そしてこの人心の鉦先は政府へ向けられて、この志士を国法を曲げてまで死刑に落とそうとしたとして、政府に対する怒涛のごとき攻撃となった。そしてその結果、大審院長児島惟謙はこの時流の頂点に押し上げられることにもなったわけである。大審院特裁部判事たちもまた、どうやらこの人心の変化に大きく動かされたようである。判事たちの意向の変更は、たしかに児島院長の強硬勸説によるとは言え、その受入れ決定の心理的背景をなしているが、この人心の逆転的变化であったと言える。

さらに、この逆転的動向をはっきり示すのが、明治天皇の東京還幸風景であった。五月二一日午前九時二五分京都七条駅発のお召列車が東上する途次のどの停車駅においても、駅頭は奉迎する民衆の歓呼の声で埋まった。終着新橋

駅ではまるで凱旋將軍でも迎えるごとく、人波は銀座通にまで満ち満ち、ために鉄道馬車は人波に阻まれて動けなかった。市内には戸毎に国旗と祝賀提灯が掲げられているし、宮城で帰還の沿道では、奉迎する各学校の学生・生徒の大歓平、これに驚いた警乗士官の馬が棒立ちとなり、その士官が落馬するという珍事さえ起きたという。

### 結び（余談）

少し附け加えて結びにしよう。ロシアの帝国主義・南下政策の推進の中でも、時の皇帝、ニ

コラス皇太子の父アレキサンドル三世は平和的思考の持主であって、国際慣行からすれば当然に犯人が死罪になることを、死罪宥恕の申入れを行って減刑に持っていきたいと考えていたようである。もちろん、事件当時、この皇帝の真意は日本側に分かるはずもなかった。そのような意向を持っていたアレキサンドル三世としては、わが大審院の判決にはやはり心残りがあつたようであるが、結果としてそれによしとしていたようである。

ニコラス皇太子は、すでに述べたように、日本側に対して悪感情など懷いていないことを繰り返えし明言していたのに、帰国後、どういうわけか、事毎に日本人蔑視の言葉を吐いていたそうである。有名なウィット伯がそのことを回想録の中で書いている。大津事件三年後の七月二五日には日清戦争が勃発し、同じ年一月に皇太子は、父アレキサンドル三世の逝去によって即位し、ニコラス二世となっている（二六才）。このニコラス二世は日清戦争戦果に対するいわゆる三国干渉（露・独・仏）の音頭取りであり、またハーグ平和会議（一八九九年）の提唱者でもある。一九〇四年には日露戦争が始まった。一九一七年のロシア二月革命によって廃位させられたニコラス二世は、ロシア最後の皇帝となったが、同じ年のボルシェヴィキ革命（十月革命）のあと、家族ともども無残な最後を遂げている。

この「大津事件」を通して、つくづく考えさせられるのは、日本人の国民意識についてである。そこで見て取れるのは、ロシアに対する畏怖心と敵愾心とから成る複合的意識構造である。このような国際感覚・意識構造は、その後の大正期・昭和五〇年代半ばを経過して、どのような変化を見たのであろうか。今日の時点において、それはわれわれ日本人にとっての大きな反省事項と言わなければならないであろう。